



訪れたいまち

第15回 福島県南会津郡下郷町大内宿

江戸地代の街道宿場町の面影を残す大内宿は、戦後の高度成長の波が押し寄せる中、住民は近代化か保存か苦悩し、保存していくことを決めた。日本の原風景、暮らしが残るこの地は人びとを魅了し、多くの観光客が訪れるようになった。



昔から受け継がれてきた 景観と暮らし

福島県会津地方南部の山間を走る会津鉄道。両側に山がせまる湯野上温泉駅は日本で唯一の茅葺き屋根の駅だ。ここから車で10分ほど山道を進んだ大内宿には江戸時代の宿場町の面影がそのまま残されている。

宿場を中心とした南北500m、東西200mの範囲にあり、旧街道の両側には茅葺き、寄棟造で妻を街道に面した木造建築が続いている。各家は南北に走る旧街道から一定の範囲後退させ建てられているため、壁面線が揃い、整然とした町並みが見事だ。街道の両側には割石積の側溝が走り、山から自然の水を引き込み、家の前には洗い場が設けられている。以前は舗装され、車も通行していた旧街道だが、今は舗装をはがし、昔ながらの道に還元され、車は通行禁止だ。それぞれの家では街道に面した縁側で地元の特産品などのお土産を販売している。また、この地域では昔より大切なお客様には地元でとれたそばとお餅でもてなしをしてきた。宿内のお食事処で各家庭に受け継がれてきたそばとお餅を名物として味わうことができる。

街道の中央には、かつての間屋本陣を再建した大内宿町並み展示館があり、使用されていた農具、生活用

具や写真などが展示され、当時の生活が伺える。街道に面して大きな鳥居がある。その先を進むと大きな杉の木に囲まれた神社があらわれる。後白河天皇の第2皇子の高倉宮以仁王を祀った大内宿の総鎮守の高倉神社だ。大内宿には古くからの伝説がある。平安時代末期、高倉宮以仁親王が平家打倒の戦いに敗れ、越後へ落ちのびる際にこの地にしばらく逗留され、都の風情によく似ていると歌を詠まれたと伝えられている。毎年7月2日には天狗などの時代衣装を身にまとった行



会津鉄道湯野上温泉駅。日本でただ1つの茅葺き屋根の駅舎。



割石積の側溝。街道の両側には山からの清らかな自然水が引かれ、心地よい音をたてて流れている。

※1 寄棟造…4方向に傾斜する屋根面をもち、台形と三角形が2ずつからなる。
 ※2 妻…屋根面の三角形になった部分

列が練り歩く、古式豊かな「半夏まつり」が開催される。

さまざまな苦悩を経て保存へ

今では昔ながらの景観などで多くの観光客を魅了する大内宿だが、ここまで来る道のりは決して平坦ではなく、住民の理解を得るためには長い年月を要した。

大内宿の成り立ちは、古内、宮内、糠塚、坂本の4つの村が集合し山本村となり、後に大内村に変わったと伝

高倉宮以仁王をお祀りしている大内宿総鎮守の高倉神社。街道から離れ、静かな農道を進んだ先の鬱蒼とした杉林に囲まれた社。



毎年半夏の日(7月2日)に行われる高倉神社の祭礼。時代衣装を身にまとった行列が歩く時代絵巻。大内宿の夏は「半夏まつり」で始まる。



大内宿町並み展示館。江戸時代の本陣を再建。中には農具や生活用品、写真など1,300点あまりが展示されている。

えられている。宿場町として本格的に整備されたのは江戸時代。徳川幕府による全国完全支配の一環として、五街道を始め脇街道の宿駅制度が進められた。会津藩により主要幹線街道として重点的に整備された会津若松城下と下野国今市宿(今の栃木県今市)を結ぶ下野街道。その主要宿場駅としてだ。

当初は会津藩などの参勤交代や江戸への荷物の輸送に利用され、宿場町として繁栄した。その後、幕府による参勤交代での脇街道通行禁止や災害による通行不能などにより、交通量は激減。明治17年の会津三方道路の開設により主要道路からはずれ、宿場としての生計は成り立たなくなり、農業を中心としたひなびた寒村として残されてきた。

大内宿が注目を集めるきっかけになったのは、昭和42年、当時、武蔵野美術大学生(現教授)の相沢韶男氏が会津茅葺き職人の調査で大内宿に入り、その姿に圧倒され、文化庁へ保存の必要性を報告。新聞やテレビにも紹介された。大内宿の景観が保存すべき価値があることに住民は驚き、近代化か保存か、今後の大内宿の将来に不安と焦りの日々が続く。更には金持ちはトタン屋根、貧乏人は茅葺き屋根と決めつけた報道に人びとは反発し、保存意欲を後退させた。その後も意見が二分する中、昭和

52年の大内ダム建設により対立感情は激化し、ダムの補償などによる現金が入ると急速にトタン屋根、アルミサッシへの改修と近代化へ疾走するなど混乱は続いた。

現在、大内区の区長であり、当時は下郷町役場職員だった吉村徳男さんは振り返る。「当時の町長が、ダム工事が終わったら出稼ぎするのか。保存すれば観光で生計をたてることができる」と地域と会合を重ね、町役場に勤めていた私も、各家1軒1軒説得して回り保存を訴えました」

コミュニティを守ることが地域の力

多くの苦悩を乗り越え、昭和56年4月、大内宿は国の重要伝統的建造物群保存地区として認定され、町並み保存の意識が徐々に芽生えることとなった。同年には「大内宿保存会」が結成され、住民憲章(「売らない、貸さない、壊さない」を3原則)を制定し、景観規制など住民が自主的に決め取り組んできた。屋根の葺き替えが負担にならないよう茅の手配、葺き替え時の足場や道具も貸し出し、茅屋根への愛着を持ってもらうため、住民が総出で茅場の手入れや茅刈り作業などさまざまな活動も行っている。

また、保存していくためには地域のコミュニティを守っていくことが大



平成24年6月7日の大内宿。平日にもかかわらず多くの観光客で賑わう。



各家の縁側ではさまざまなお土産ものを販売。



宿の入り口の大内宿を守る住民憲章立て札。

大内宿区長の吉村徳男さん。食事処「こめや」を経営。お客様を温かく迎えてくれる。



店先では岩魚の塩焼きやお餅も販売。



春の風物詩茅屋根の葺き替え。茅屋根は3分割し、数年かけて葺き替える。

大切なお客様をもてなすそばとち餅。宿内のお食事処で各家に伝わる味が堪能できる。



大内宿では49世帯、170弱の住民の中に、各家の代表者49名からなる行政組

「自分達の衣食住の文化を磨き、営んでいくことで人が見に来てくれる。めんどくさいことをやっつけていけば皆の力を借りることになるので皆が同じ方向を向くことになる」と吉村さんは言う。

大内宿の伝統的建造物である茅葺き木造建築を守っていくために最も怖いのが火災だ。火災報知器や消火設備の整備はもちろん大内宿防炎会を頂点として消防団、婦人消防隊、火消し組などが大内宿を火災から守るための取り組みを行っている。子どもたちは夏休みに火の用心の夜回りを行い、花火は8月15日の年一回のみとするなど小さい頃から火災に弱い茅屋根を守ることを覚えていく。

織の大内区を始め、消防隊、老人会、青年会、子ども会など13の団体があり、多くの年中行事も行われている。「それぞれの団体がそれぞれの役割を担っています。各団体が活動していくことや年中行事を行っていくことで、地域のコミュニティを作り、それが地域の力になります。その結果、自然と次世代に受け継がれていく。普通に生活を送ることが大切だと思います」

風評被害を乗り越えて

観光客は年々増加し、平成21年には年間120万人が大内宿を訪れた。観光客が増えることで大きな経済効果をもたらし、観光で生計を立てることができるようになり、当初は保存に消極的だった人たちも自発的に景観整備に努めるようになった。しかし、昨年は風評被害により観光客は大きく減少。

「いろいろな方のおかげで今年に入り観光客も戻ってくるようになりました。来ていただいたお客様に感謝を込めて4月から、きてくれてありがとうの旗を作り駐車場に立てました。秋には白色のそばの花を咲かせ、来年春には畑に菜の花による黄色い絨毯でお出迎えを計画しています。もはやがんばろうではなく前向きな姿勢で観光客をお迎えしていきます」

かつての日本にはどこにでもあった

懐かしい農村の風景や暮らし。近代化により現在ではそのほとんどを失った。今も昔ながらの風景や暮らしが守られている大内宿に、日本人の心の中に刻まれているDNAがその郷愁を求め、人びとを引き寄せている。



放水銃の一斉放水訓練。

大内宿の入り口では「きてくれてありがとう」の旗がお出迎え。

ふるさと 手作り郷土賞

国土交通省では地域の魅力や個性を創出している良質な社会資本及びそれと関わりをもつ優れた地域活動を一体の成果として発掘し、大臣表彰を行っています。好事例として広く紹介することにより、各地の個性的で魅力ある郷土づくりに向けた取り組みが一層推進されることを目指しています。大内宿は昭和61年に受賞、平成17年には大賞を受賞。

検索 手作り郷土賞

MLITレポート

全国各地で働く国土交通省職員が地元を紹介します。

Reporter

東北運輸局
企画観光部
観光地域振興課
荒明 恵莉



東北地方では、「こころをむすび、出会いをつくる」をテーマに、東北地域全体を一種の博覧会会場に見立て、今年の3月18日から来年の3月31日まで東北観光博を開催しています。

東北全域の主要な観光地域28箇所をゾーンに設定。個性あふれる各ゾーンの入り口には「旅のサロン」を設置し、旅のコンシェルジュ(地域観光案内人)がお客様をお出迎えし、とっておきのオススメ情報をご案内します。

各ゾーン内に点在する「旅の駅」では、いろいろなお店、レストラン、観光施設などのスタッフが地域観光案内人として訪れたお客様に、その土地の自慢をお伝えします。

また、旅のサロンでは「東北パスポート」を発行(無料)しています。各ゾーン内の

「旅のサロン」で用意しているオリジナルスタンプを集めると嬉しいプレゼントがもらえたり、パスポート加盟店で提示するとお店ごとのサービスもあり、東北を巡るほど、使うほどお得なパスポートです(スマートフォンで使えるデジタルパスポートもあります)。

各ゾーンにはその土地ならではの体験を楽しんでもらう「滞在プログラム」もご用意しています。ぜひ皆様も夏休みや秋の行楽シーズンには「東北パスポート」を手に、東北各地を巡り、東北の人びとと出会い、ふれあってみませんか。



東北観光博で楽しむための2つのツール



公式ガイドブック
ポータルサイトからも
ダウンロードできます。

東北パスポート
まずは各ゾーンの
「旅のサロン」でGET!

東北観光博ポータルサイト
<http://www.visitjapan-tohoku.org>

検索 東北観光博

東北ぜんぶが博覧会場。
全28ゾーンで皆様をお待ちしています。